

園長だより NO125

しとしと、じめじめ、時折、猛暑のごとく暑い日が続く、ここ近年では梅雨らしい梅雨といえるかもしれません。 台風の連続到来、大雨の警報、異常気象が常態化の現在ではこの気象との付き合いをしつかりしなければなりません。雨が続き、日照時間の低下もあり、コメや野菜の生育にも影響が出ていると伝えられ、あーまたかと思いつながらも市民レベルでできることは限られています。でも災害に備えることや環境にやさしく生活すること、個々の心がけて私たちを取り巻く生活環境も良い循環に向かって行くことでしょう。それぞれが、気かけ行動に移していくことが大切と思っています。

梅雨の過ごし方

かなり前の事です。子どもの頃、雨が降ることが嫌いではなかった。むしろ仲間と共に雨ふりを楽しんでいた。低学年のころは傘をさし、長靴を履き登校することに特別感すら抱いていた、当然、そんな感覚になっているからまっすぐ帰宅とはいかない、通学路から外れ、神社や田んぼのあぜ道をわざわざ通り、ぬかるみや、水たまりと戯れていた、突然の雷雨などは仲間と共に歓喜の嵐、強い雨に打たれず、ずぶぬれで帰ることは当たり前であった、 現在と違い、自然が残っていた、雨の日の田んぼ、オタマジャクシやザリガニ、林の中のカタツムリ、子どもながらに雨を



喜んでいるのは、僕らだけでないと思ったことをかすかに記憶している。

昨今の異常気象、梅雨又は暑い夏の到来、梅雨が明けても、高い気温で戸外には出られないことが続く、こんな状況だからこの時期の保育園での生活もいろいろと知恵を絞り、考えている。

都内の保育園に在籍していた時の話です。園庭が狭い、戸外で遊ぶフィールドがないところです。毎日、散歩に行きます。保育園を起点にして歩けるだろうと思える公園はすべて散歩のエリアにはいる。今日はここ、明日は江戸川の土手、明後日は中川というように散歩の場所は限りなくあった。 歩くことが1歳児から日常化していた。1歳児を受け持った時も考えられない距離を歩くことも度々であった、※無理強いはいしません。毎日こつこつと楽しんでいるといれば3キロ、4キロは歩いてしまいます 前置きが長くなりましたが毎日の生活に散歩が位置づいているので雨の日、特に梅雨時期、子ども達はいても、たってもいられない状況になります。 一人の男性保育士が素朴な疑問を投げかけた「雨の日は散歩に行けないのでしょうか？」 他の保育士の反応といえば、「行けないことはないね」「ダメということもない」と肯定的な意見「じゃいくか」と同じ方向へと意見が向いていく。 ただ、雨の日である、晴天時より安全



面においてのリスクは上がる。そんなことを考えて、いろいろ準備、対策、予測し安全に行けることを確認し雨の日散歩が定型化していった。

大人の概念を変え、季節に柔軟に対応していく事で子ども達の心も豊かに、安定していく、都内でも車、自転車での送迎が大半である。親子で歩きながら季節事象を楽しみ登降園する家庭は少ない。雨にうたれているアジサイを初めて見る子どもも多かった。雨宿りをしているひばりやカラスに遭遇するのもはじめて、かっぱをきて公園で鬼ごっこもはじめて、本来は子どもの世界はいつも生き生きとした新鮮なものでなくてはならないと、その時、保育者同士で話したことを思い出す。加えて驚きと感激にあふれる時間であった。 私たち保育者は大人になるにつれて感性がにぶり、決まりきった概念を押し通してしまうことを子ども達から教えてもらった時間であった、できないことより、どうしたらできるだろうと、その先には子どもの豊かな感性が溢れんばかりにあふれていることを感じられた。

それからというものの「雨の日散歩」は時折することになっていく

大人は、いや世間一般「雨の日は室内あそび」と決めている。 でも子ども達には自然に触れる機会であるから、時々意識してすごしたいものです。 保育園では8時間～長時



2026.7.8

間保育があたり前、子どものエネルギーが室内に集中したまり過ぎると、摩擦を生みだす、良い意味でのお互いの刺激もあれば、喧嘩のようなことも、気持ちが高揚すれば声のトーンも上がる。 環境の構成、保育室以外のホール(戸外)などをバランスよく活用していく工夫が必要です。ここ数年では梅雨から夏の過ごし方を保育園の現場では考え、実践につなげている。環境構成には人的なものもある。クラスの担任に限らずクラスの枠を超えて他クラスの保育士が関わったり、異年齢の交流や興味関心に応じた環境の設定など ※あそこのクラスいったら〇〇ができる等状況に応じた試行実践も必要と考えます。

夏の甲子園 高校野球のシーズンへ

この時期、高校野球のシーズン、いろいろなスポーツがあるが夏は高校野球というのが定着している。野球人口も減り続けている。部員減少でいくつかの学校での連合チームなるものもある。かかわった子が予選に出ていることもあり、毎年、選手名簿などというものを入手し卒園児が出ていないかなーと期待をよせチェックする。数名はいるものです。

機会が合えば観戦に行くのですが、仕事上なかなかタイミングがあいしません。

たくましく育った子ども達がいること、すくすくと育ち上げていることが私たちの励みになっています。

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)

